



Profile—大村彰道

1963年、東京大学教育学部教育心理学卒業。1971年、スタンフォード大学大学院修了 (Ph.D.)。専門は教育心理学、認知心理学。著書は『教育心理学：発達と学習指導の心理学』（編著、東京大学出版会）、『教育心理学研究の技法』（編著、福村出版）、『文章理解の心理学』（監修、北大路書房）など。

振り返ると、多くの方々の好意により、充実した留学生活を送れたことに感謝する気持ちでいっぱいになります。

大学2年の時から、肥田野直先生に教育心理学や研究法・統計学を習い、米国留学の希望を強く抱くようになりました。池田央氏がイリノイ大学から帰国されたのを機会に、友人たちと数理統計学の研究会を作り、教科書の章末問題をすべて解く指導をいただき、留学への準備を始めました。吉田章宏氏がイリノイ大学に留学され、イリノイに行くなら指導者を誰にしたら良いかまで心配していただきました。

「高校物理学習における認知傾向」という修士論文を書きました。これがATI（適性処遇交互作用）の考えに近いということで、L.J.クロンバック先生のもとに行くのが良いだろうと東洋先生が推薦状を書いてくださいました。クロンバック先生がイリノイからスタンフォード大学へと移られたので、留学先をスタンフォ

スタンフォード大学院留学記

浄土宗東運寺 住職・東京大学 名誉教授

大村彰道（おおむら あきみち）

ドの教育学部と決め、そこに奨学金を応募しました。幸いにも、教育学部副学部長で教育心理学者のA.コラダルチ先生が東大に来られた歓迎会に私も呼んでもらえました。それが私に対する面接試験だったことが後でわかりました。

1967年9月にスタンフォードに着きました。クロンバック先生が一年間東大へ行き不在になるため、R.E.スノー助教授が指導者になってくれました。4歳上の兄貴のような感じの親切な人で、ATI研究のプロジェクトをクロンバック先生と始めたばかりで、私もそこで助手として働くことになりました。

またも幸運なことに、京都大学教育学部の齋藤稔正氏がE.R.ヒルガードのもとに催眠研究で留学されていました。ヒルガード研究室の齋藤氏をしばしば訪ね、日常生活から研究状況の助言まで親切にしてもらいました。当時、数理心理学やCAI（コンピュータ利用の教育）の研究が盛んで、G.H.パウアー、R.C.アトキンソン（記憶・学習の数理モデル）、R.N.シェパード（クラスター分析）のゼミやE.A.ファイゲンバウム（人工知能論）の講義に参加しました。U.ナイサー（1967）『認知心理学』を興奮して読みました。各先生は自分の指導学生だけのための研究会を持っていて、そこでしか進行中の最新の研究の様子がわからないこと、手取り足取り実に懇切に研究指導する徒弟制度を用いていることなど、スタンフォードの特徴もわかりました。

一方、日本から木村捨雄氏、坂元昂氏がCAIの研究や調査で来られ、お二人からも大きな影響を受けました。「教授学習の内容の系列を最適化する」ということに私の興味が絞られてきました。学習過程を確率過程として定式化することをパウアー先生から習いましたので、さらに進めて、ダイナミック・プログラミング（ロケットを目標に向けて誘導するための数学）を使えないかと勉強しました。しかし、極めて限られた学習場面でしか使えない技法だと判断し、中止しました。

その頃、クロンバック先生に「君はどちらのヒロシになりたいのか？」と尋ねられました。「東洋のようにになりたいのか、池田央のようにになりたいのか？」という質問です。数学に今一つ自信が持てないので、「東洋先生のようにになりたいです」と答えました。先生の気持ちとしては、温めておられた「共分散の解析方法の研究」で論文を書かせたかったことが後でわかりました。

結局、「教授学習内容の順序や構造を図示することが理解を促進するだろう」という仮説のもとで、ATIの枠組みで論文を書きました。クロンバック先生もスノー先生も理論家で、研究・調査の具体的なフィールドがなく、実験参加者を近所の短大に行って独力で集めなければならず、大変苦労しました。この時ばかりは、心理学科の組織的に参加者をリクルートできる方式をうらやましく思ったものです。